

地理A、地理B

第1 高等学校教科担当教員の意見・評価

地 理 A

1 前 文

「地理A」は国際化の進展等社会の変化に伴って現代世界が抱えている課題を地理的に考察することに重点が置かれている。そのために、作業的、体験的な学習を重視し地理的技能を高めることや、今日の課題を日常生活と関連付けて取り扱い、生徒の興味・関心に配慮した内容や方法を工夫したところに特徴がある。

平成23年度の大学入試センター試験（以下「センター試験」という。）は、志願者数、受験者数とも昨年度より増加し、地理歴史科の受験者数は367,293人（追・再試験受験者を含む）となった。教科全体としては2,792人増加しているが、昨年度と比べると、「世界史B」で受験者が減少したが、「世界史A」・「日本史A」・「日本史B」・「地理A」・「地理B」は増加した。「地理A」の受験者は5,345人で、昨年度に比べ353人の増加となり、増加率で見ると「日本史A」の12.7%に次いで「地理A」の7.1%、「世界史A」の5.8%、「地理B」3.3%、「日本史B」0.7%の順であった。

一方、地理歴史科と公民科との2科目受験者数は230,424人で、昨年度に比べて4,173人増加（「地理A」は297人増加、「地理B」は2,020人増加）した。そのうち、A科目の受験者は8,778人で、「地理A」の割合は46%を占めており、「日本史A」・「世界史A」より高くなっている。なお、「地理A」の2科目受験者のうち68%が2科目目に「現代社会」を選択している。

本試験の平均点については、「地理A」52.58点・「地理B」66.40点と、昨年度と比較して「地理A」は1.00点下がり、「地理B」は1.29点上がったが、A科目・B科目の中では「地理A」・「地理B」がそれぞれ最も高かった。また、「地理A」と「地理B」の平均点の差は、昨年度の11.53点から13.82点に広がったが、その幅は「世界史A」と「世界史B」との差（13.04点）や、「日本史A」と「日本史B」との差（12.10点）より大きくなっている。A科目においては、最高の「地理A」と最低の「世界史A」の平均点の差が4.16点であり、昨年度の最高の「地理A」と最低の「日本史A」の平均点の差の5.16点から縮まった。地理歴史科、公民科の2科目受験が多い現状の中で、地理歴史科はもとより公民科の科目も含めて、平均点の差により受験者の有利不利が生じないように、更なる配慮をお願いしたい。

なお、試験問題の具体的な検討に当たっては、例年どおり次の視点から行った。

- (1) 高等学校学習指導要領の目標、内容等を踏まえているか。
- (2) 教科書や学習状況を踏まえた内容になっているか。
- (3) 基礎的な知識や事項の解説並びに地図や統計資料などを分析、考察して処理する能力を測定し、地理的な見方や考え方を問うことのできる内容になっているか。
- (4) 特定の分野や地域に偏ることなく、総合的な理解力を問う内容になっているか。
- (5) 問題文や選択肢の表現、難易度、形式、配点、正答率等に問題点や偏りがないように配慮され

ているか。

2 試験問題の内容・範囲等

今年度は平成11年告示高等学校学習指導要領による6回目の試験であるが、全般的に同要領の目標や内容にそった問題であった。

今年度の問題は、昨年度と同様に複雑な図表の読み取りは少なかったが、一部に「地理A」の学習範囲で取り上げることが一般的でない事項や地域からの出題も見られる。出題分野については、昨年度と同様に、全般的に地理的な見方や考え方及び地理的な技能を活用させる問題を中心に出题されている。ただ、図表を読み取るだけで地理的知識がなくても容易に解答できる問題も見られたり、写真が見つらい問題も見られた。

(1) 出題分野

- 第1問 地理の基礎的事項
- 第2問 国境を越えた様々な結び付き
- 第3問 東アジアとその周辺地域
- 第4問 地球的課題と国際協力
- 第5問 佐賀県内の地域調査

(2) 内容

第1問 地理の基礎的事項に関する問題。時差の計算、気候分布、大地形、国境、宗教分布、都市の形態、土地利用、人口ピラミッドなど基礎的事項が幅広く問われている。その反面、設問間での系統性が弱く、各設問が単発的に出題されているという印象である。ただ、冒頭の地図は、五つの小問だけに使用しているため、図中には11個の地名や記号が盛り込まれていて昨年よりは見やすくなった。

問1 図1の中のA地点と東京との経度差から東京の時刻を求める問題。図1の中に経線間隔も記入されており、時差の基本的な理解を問う標準的な設問である。

問2 温暖湿潤気候区を判別する問題。「地理A」の知識では図1中の4地点のうち3地点が温帯気候区であるため、判断に迷うが、G地点が東京とほぼ同緯度の大陸東岸であるので解答は容易である。

問3 世界の大地形の分布についての問題。選択肢として示された四つの地域の位置のうち、ウ地点のあたりが古期造山帯であると判断できれば解答は容易である。ただ、「地理A」の学習範囲でここまで詳しく取り上げていない場合が多い。

問4 国境についての問題。「地理A」の学習状況からすると、各国の代表的な国境をここまで学習する機会は少なく、地理的思考力が問われる設問である。ただし、各国の地図を掲載したことで図1を見る機会が減り、地理的な知識があれば解答できる設問になってしまった。

問5 東南アジアの宗教分布についての問題。東南アジアは生活・文化を学習しているので解答は容易である。東南アジアの宗教分布について基本的な理解を問う標準的な設問である。

問6 都市の街路形態についての問題。写真がやや不鮮明であるが、街路の形態は判別できる。ただ、都市の街路形態は「地理A」では学習しないので、都市の建物等で出題してほしい。

い。

問7 地形図を使った土地利用についての問題。今までにない出題形態である。針葉樹林や田、畑がどのような所に分布しているかという基本的な知識を用いて、読図によって解答させる良問である。

問8 イギリスの人口ピラミッドを完成させる問題。今までは、完成した人口ピラミッドの問題は出題されていたが、それぞれの年齢階層にふさわしい部分を見つけて完成させるという出題は初めてである。地理的なものの見方や考え方を問う良問である。

第2問 現代世界における国境を越えた様々な結び付きに関する問題。「地理A」の学習では大きく取り扱われる分野である。全般的に学習範囲を踏まえた出題ではあるが、地理的思考力を測る問題が多かったため、やや難易度が高かったように思われる。

問1 貿易による国と国との結び付きを思考する問題。近隣国や旧植民地との関係を連想し、解答させる標準的な設問である。

問2 東南アジア主要国から日本への輸出品の変化について答える知識問題。解答するために必要な知識（選択肢3か国の主要輸出品目）が「地理A」の学習状況からするとやや細かい。

問3 国際航空路線を示す地図を読み取り、都市名を思考する問題。航空路線図が正射図法で示され、見慣れない図であったため、深い思考力が求められる良問。注釈の記載方法などが受験者に伝わりにくく、工夫が必要である。

問4 国内各空港における外国人入国者数の内訳から国名を思考する問題。近隣国との位置関係から解答を導くという、地理的思考力を測る良問である。

問5 国外で働く労働者からの送金受取額を示す図を読み取り、その世界的な特徴から解答する問題。正答となる④の文章と資料である図3との関連性が薄く、設問の趣旨を生かした選択肢の工夫が必要である。

問6 海外に長期滞在する日本人の職業と地域性との関連から解答する問題。「政府関係職員」と「報道関係者」の判別は社会常識的な知識を用いる必要があり、「地理A」の学習状況からすると、やや難易度が高い設問である。

問7 世界の国・地域における輸送手段の整備状況について答える知識問題。一般的な常識の範囲で容易に解答できる設問である。

第3問 東アジアとその周辺地域に関する問題。「地理A」の学習では大きく取り扱われる分野であり、特に生活・文化の特徴や日本との共通性、異質性を考えていくものである。学習範囲が意識された出題ではあるが、細かい知識を要する問題が見られ、難易度が高かったように思われる。

問1 東アジアの自然環境と人間活動との関係を答える標準的な知識問題。問題文は人間活動とあるが農林業に関する選択肢が並び、問3と類似している。

問2 雨温図を読み取り、東アジア4地点の気候の特徴を思考する問題。大陸性気候の基本的な理解を問う標準的な設問である。

問3 中国における農業分布の特徴を答える基礎的な知識問題。「地理A」の学習範囲を確実に踏まえたものである。問1と求める知識が類似しており、農業以外の幅広い知識を問うよ

うな設問であってもよいと思われる。

問4 人口割合及び人口増加率の特徴を示す表1を読み取り、該当する東アジアの国を思考する問題。発展途上国の15歳未満人口割合と人口増加率から解答を導くことができるが、表に含まれる「女性人口の割合」に大きな差異がないため、思考の判断材料としては適していない。

問5 東アジアとその周辺地域における産業発展や資源開発の状況を答える知識問題。細かい知識を必要とするため、「地理A」の学習状況からすると、やや難易度が高い設問である。

問6 東アジアの伝統的な家屋景観と、地域の自然・生活との関連を思考する問題。写真による資料であり、それぞれに説明文もあるため、受験者は思考しやすかったように思う。

問7 東アジアにおける観光客の流動状況を示す表を読み取り、該当する国・地域を思考する問題。中国とホンコンの選択は指標を定めることが困難であるため、難問である。

第4問 地球的課題と国際協力に関する問題。問1と問6の2問が「地理B」との共通問題である。

環境問題、自然災害、エネルギー問題、人口問題、都市問題、難民問題、国際協力など幅広いテーマが出題されている。地図や図表を使いながら、「地理A」の学習で培われた地理的な見方や考え方を問おうとしており、難易度のバランスもとれた良問である。ただし、一部では「地理A」の学習内容では難易度の高い知識が必要な問題も見られた。

問1 3地域における人為的な原因による環境問題についての問題。「地理B」との共通問題であり、「地理A」の学習内容にも配慮された基礎的な設問である。

問2 スマトラ沖地震の津波被害についての問題。教科書でも取り上げられているが、一般常識でも判断が可能である基礎的な設問である。

問3 カナダ、中国、日本、フランスの4か国の1次エネルギーの供給割合についての問題。取り上げられた4か国も「地理A」の学習内容にそったものであり、各国のエネルギー事情を踏まえた上で、グラフを読み取りながら解答させる標準的な設問である。

問4 スウェーデン、中国、ナイジェリア、日本の4か国の65歳以上人口率の推移についての問題。各国の人口問題の地域性を踏まえた標準的な設問である。ただし、解答の過程で必ずしも資料の読み取りが必要でなく、問い方に工夫が必要である。

問5 シェンヤン、ジャカルタ、東京、ロンドンの都市問題についての問題。4都市の都市問題の現状を踏まえた標準的な設問である。ただし、「地理A」の学習だけでは、シェンヤンの位置や特色を特定することが難しい。

問6 スーダン、ミャンマー、ロシアの難民問題とその背景についての問題。「地理B」との共通問題であるが、選択肢の中に、「地理A」の学習ではあまり取り上げられない知識や時事的な事項が見られる。

問7 コートジボワール、ベトナム、ボリビア、モンゴルの4か国に対するODA（政府開発援助）供与国についての問題。「地理A」では、4か国の特徴を学習する機会が乏しく、近隣国又は宗主国との関係などを問うのであれば、統計地図を用いるなど問い方に工夫が必要である。

第5問 佐賀県内の地域調査に関する問題。第2問として出題された過去2年とは異なり、第5

問として出題されている。問題の構成は、全問「地理B」との共通問題となっているが、「地理A」の学習内容にも十分配慮したものであった。内容としては、地理的な見方や考え方及び地図の読図などを通じて地理的な技能の習熟度を測るとともに、現代世界の動向や地域の変容を考察させる良問である。また、「地理A」の学習として大きな位置を占める、身近な地域の国際化の進展や日本と世界との結び付きの様子について問う問題が、最終問題として見られたことも評価できる。

問1 2万5千分の1地形図の読み取りについての問題。地形図の読み取りとして基本的な設問であった。解答する上では、選択肢を図2と同じ見開きにする工夫が欲しかった。

問2 新旧2万5千分の1地形図による土地利用の変化の読み取りについての問題。地域の変容を地形図から読み取るものであるが、寺院と城跡の地図記号の有無を判読すれば解答できる基礎的な設問である。

問3 佐賀市内の土地利用に関する現地調査における調査方法についての問題。調査内容に適さない調査方法を選ぶ標準的な設問である。

問4 土地利用に関する地区ごとの現地調査結果を踏まえ、三つの地区の特徴を述べた文と土地利用を描いた図4を結び付ける問題。地理的な見方や考え方を問う非常に工夫された設問であり、図4には建物の階数を示し、平面的利用だけではなく土地利用の空間的利用からも判断させる良問である。

問5 佐賀県の地勢図と市町村ごとの収穫量の割合から大麦、水稻、ミカンの分布を問う問題。

まず収穫量の割合という相対値を図形表現図で表すことに疑問が残る。また、選択肢として大麦の地域的な栽培の特徴を「地理A」の学習内容からは考察することが困難である。

問6 日本に在住する韓国・朝鮮、中国、フィリピンを国籍とする外国人について述べた文と、外国人登録者数の年次推移を結び付ける問題。身近な地域の国際化の進展や日本と世界との結び付きの様子について問う設問であり、ゴミの分類表を用いるなど身近な例から国際化を探る工夫がなされており、また選択肢とグラフとの関連性から解答を導き出させる地理的思考力を問う良問である。

3 分量・程度

(1) 問題の程度

本試験において、平均点が52.58点となり、難易度は昨年度並であった。平均点が上がらない要因として次のようなことが考えられる。

- ① 図表を読み取るのに「地理B」の細かい知識を必要とする問題があった。
- ② 「地理A」の学習の中で取り上げられることが多い、写真を利用した問題が5問から2問に減少した。
- ③ 組合せの解答が昨年10問から13問に増加した。

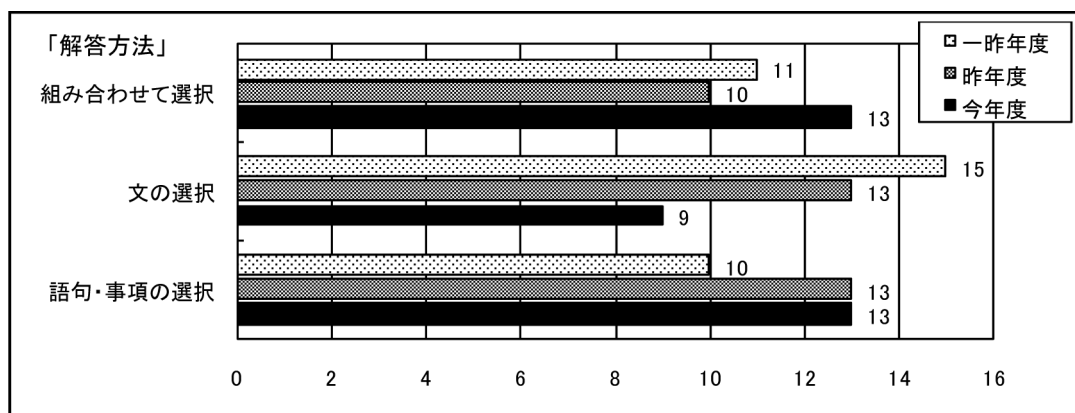
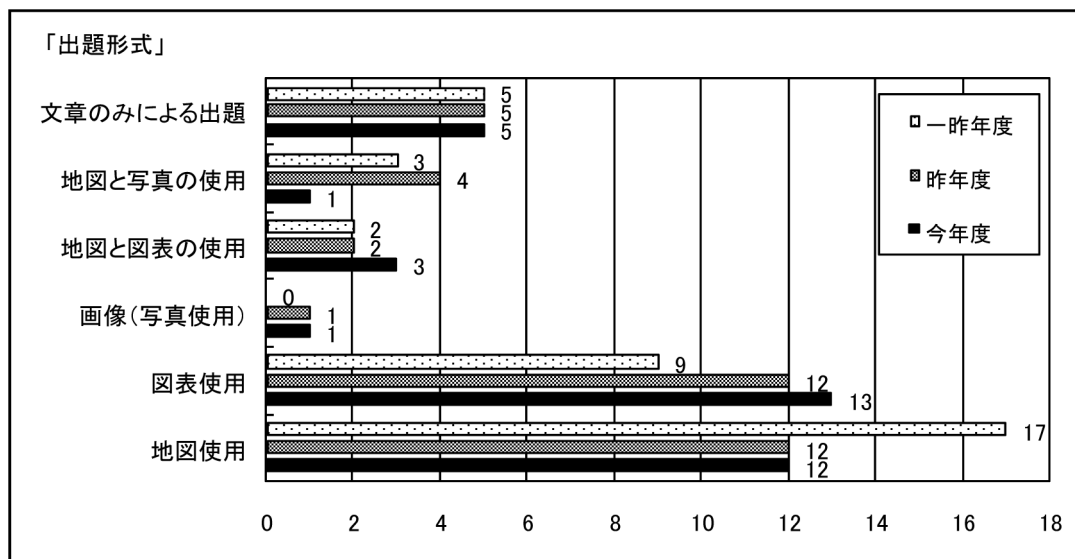
(2) 設問数

設問数は近年大きな変化はなく、大問数は5問、小問数は35問であった。60分の試験時間を考慮すると大問、小問数ともに適切であると言える。

4 表 現・形 式

(1) 形式・配点

小問の出題形式と解答方法は、下のグラフのとおりである。今年度については文の選択から解答する方法が減少し、組み合わせて選択し解答する方法が増加した。



なお、大問の形式については、小問集合（第1問）、地図と図表を中心としたもの（第2問・第4問）、地図を用いてテーマを示したもの（第3問）、地形図を用いてテーマを示したもの（第5問）とバランス良く構成されている。

配点については、第1問から3題、第5問から2題を2点とし、その他はすべて3点であった。配点が2点の問題内容は基礎的な知識問題と思考問題が混在している。基礎的な知識問題を2点とし、思考問題は3点とすることが望ましいと考える。

(2) 表 現

地図・写真に不適切なものは見られず、分かりやすいものであった。第2問の問3の注釈記載方法は読み取りにくく、改善していただきたい。第5問の問5の図5については階級区分図であった方が望ましい。

5 要 約

「地理A」は受験者が少ない上に、幅広い層の生徒が受験するため、難易度の調整についてはかなり難しいと考えられるが、今後とも適当な難易度の問題と、基礎的な出題内容、範囲、形式の作問をお願いしたい。

今年度の本試験でも、「地理A」の高等学校学習指導要領で事項や事例を選択して扱うとされている内容からの出題が見られた。センター試験でこのような出題があると、それに対応するため、項目間選択や事例学習の趣旨が生かされなくなる。以上のことから、出題については、特定の学習事項や地域の知識・理解だけを問うのではない出題をお願いしたい。

また、「地理A」・「地理B」の問題は、例年4択が日本史や世界史より少ない。今年度の本試験の問題を見ても、4択の割合が「世界史A」・「世界史B」でそれぞれ94%・92%、「日本史A」・「日本史B」でそれぞれ88%・86%であるのに対し、「地理A」・「地理B」はそれぞれ63%・51%と明らかに差がある。この差は地理の見方や考え方を問うという科目の性質上やむを得ないことではあるが、これから受験科目を選択する高校生の中で、そのことが地理を避ける要因の一つになることがないか危惧される。難易度も含め、これからも地理歴史科の出題者間で話し合いを重ね、大きな差にならないような調整をしていただきたい。

今後の出題に際しては、一考をお願いしたい点を次に掲げる。

- ① 「地理A」では作業的、体験的な学習を重視し地理的技能を高めることが学習のねらいの一つである。「地理A」の履修者にとって、学習の範囲を超えるような細かな知識を問う設問は避け、「地理A」のねらいや学習状況を踏まえた問題作成をお願いしたい。
- ② 単調な出題形式や単純な図表の読み取りにならないような工夫や、着眼点を導きやすいような説明文をつける工夫などをお願いしたい。特に、事項や事例を選択して扱う内容に関しては、学習していない生徒でも他の地域や地理的事象から推察して解答できるよう、問い方の工夫をお願いしたい。
- ③ 「地理A」・「地理B」の共通問題は、今年度は大問一つ（第5問）及び小問二つ（第4問の小問7問中2問が共通）で出題された。昨年度に比べ「地理A」の生徒に対しても配慮がなされており、来年度以降も共通問題とした場合においても、大問及び小問について「地理A」にも配慮した内容や問い方にしてほしい。

センター試験が高等学校現場に与える影響は大きく、センター試験が知識偏重から思考力、判断力を求める出題を増やしたことで授業が変わってきている。次年度から受験の形態が変更となるため、「国際社会に主体的に生きる日本人としての自覚と資質を養う」ことにつながる、「地理A」独自の学習内容を強く意識した、質の高い出題をお願いしたい。最後に、今年度作問に当たられた諸先生方の御努力に敬意を表したい。

地 理 B

1 前 文

平成23年度の大学入試センター試験（以下「センター試験」という。）の受験者は、昨年度と比べ7,193人増加した。これに伴って地理歴史科受験者数は昨年度に比べ2,792人の増加となった。

本年度の「地理B」受験者数は113,809人で、昨年度より3,601人の増加となった。「世界史B」は2,875人の減少、「日本史B」は1,077人の増加であり、この数年「地理B」の受験者数は最も増加傾向にある。地理歴史科と公民科の2科目受験者数は昨年度より4,173人増加し、「地理B」と公民科の受験者は2,020人増加した。本年度も「日本史B」と公民科の受験者数が91,684人で最も多く、次いで「地理B」と公民科の受験者数が73,529人（全体の31.9%）となった。これは昨年度と同様の傾向である。科目別に見た2科目受験の組合せで最も多かったのは、例年と同様に、「地理B」と「現代社会」の58,749人であり、「地理B」を含む2科目受験者の79.9%が2科目目に「現代社会」を選択したことになる。この組合せは、公民科における「現代社会」の受験者の増加の影響もあって、昨年度と比べ3,011人増加している。

今年度の本試験「地理B」の平均点は66.40点であった。昨年度と比べて1.29点の上昇である。この結果、今年度の「世界史B」（平均61.46点）、「日本史B」（同64.11点）との差はそれぞれ4.94点、2.29点である。昨年度と比較すると「世界史B」ではその差は5.49点から4.94点へと縮小し、「日本史B」では3.60点から2.29点へと縮小した。なお、公民3科目の平均点差は最大10.45点（「倫理」の69.42点と「政治・経済」の58.97点）であり、昨年度（9.90点）に比べ0.55点拡大した。地理歴史科の平均点は安定しているが、今後とも公民科の各科目を含めて、平均点の差異による受験者間の有利不利が生じないように、作問についての配慮をお願いしたい。

試験問題の評価については、整合性の意味からも昨年度とほぼ同様に次の視点から行った。

- (1) 高等学校学習指導要領の目標・内容に合致し、教科書及び学習活動の実態を踏まえた内容になっているか。
- (2) 地図や図表・統計資料等を分析・考察し、処理する能力を測定する内容になっているか。
- (3) 特定の分野に偏らず、総合的に「地理的な見方や考え方」を問う内容になっているか。
- (4) 問題の分量や程度、配点などに配慮しているか。
- (5) 問題文の表現や形式などに配慮しているか。
- (6) 過去の問題に対する意見・評価などを考慮して出題されているか。

2 試験問題の内容・範囲等

本年度の問題も、全般的に現行の高等学校学習指導要領の目標と内容にそった出題であった。出題範囲も、昨年度とほぼ同様に自然環境、資源と産業、生活文化と都市、地誌、現代世界の諸課題及び地域調査の6分野から項目的に、また日本を含めた世界から地域的に、バランス良く出題されていた。いずれも基本的な知識や理解を問う内容を中心に、図表や地図、写真、統計資料の読み取りなど「地理的な見方や考え方」及び「地理的技能」を問う内容が適宜組み込まれていた。このように、知識のみではなく地理情報の分析や思考、判断の能力を試す出題が定着している。なお、本

年度は衣食住の文化や宗教、伝統音楽など日常生活に密着し、歴史的背景を踏まえた設問も多く、結果的には平成21年告示の高等学校学習指導要領の教育内容改善事項等に配慮した形となった。

出題分野は、次のとおりである。大問数は6題と現行の高等学校学習指導要領による平成18年度の試験以降増減はないが、昨年度と比べ「地域調査」が第2問から第6問に移り、配列が変更となった。また、小問数は第6問から第5問に移った「現代世界の諸課題」が1題減ったことから、全体で1題減り35題となった。なお、「地理A」との共通問題は、昨年度と同様の「地域調査」の小問6題に「現代世界の諸課題」の問3、問5の小問2題が加わり、8題と昨年度より増加した。

(1) 出題分野

- 第1問 自然環境の地域性
- 第2問 世界の資源と産業
- 第3問 生活文化と都市
- 第4問 アフリカの自然と人々の生活
- 第5問 現代世界の諸課題
- 第6問 佐賀県内諸地域の地域調査

(2) 内 容

第1問 世界の自然環境の地域性に関する大問である。昨年度のように設問をA、Bには分割していないが、世界の諸地域の地形や気候及び植生や土壌、農業とのかかわりなどについて満遍なく出題された。一部には、地図やグラフを正確に読み取り判断しなければならない設問もあり、全体としてはやや難しいレベルであった。

問1 地図上の4本の線に沿った地形断面図に関する選択問題である。大地形の分布についてより正確な知識が必要であり、戸惑ったであろう。普段から世界地図に親しむ習慣が求められる。

問2 四つの地点付近に典型的に見られる土壌と農業の特徴を述べた文の選択問題である。各土壌の主な分布地域と栽培作物について基本的な知識があれば、容易に解答できる。

問3 サンフランシスコ、パリ、プサン、モントリオールにおける月平均気温と月降水量を示したグラフに関する選択問題である。ハイサーグラフの判別と、ユーラシア大陸や北アメリカ大陸における気候分布についての基本的な知識や理解があれば、解答できる。

問4 三つの地点における河川の月平均流量の年変化を示したグラフに関する組合せ問題である。河川流域の気候についての基本的な知識や理解があれば解答できるが、カとクのグラフについては変動パターンが近似しており、判断に戸惑ったであろう。

問5 四つの島国の自然環境の特徴を述べた文に関する選択問題である。島国について大地形や気候の分布に関する正確な知識や理解が求められ、やや戸惑ったであろう。

問6 サンゴ礁の三つの形態別分布を示した地図と代表的な地点の景観写真に関する組合せ問題である。サンゴ礁の形態別分布は教科書で取り扱われることが少なく、戸惑ったであろう。この形態分類については細かな知識が必要であり、教科書レベルを超えた難問である。

なお、図5にはビキニ環礁だけでなく、ムルロア環礁の範囲まで含めることが望ましい。

第2問 世界の資源と産業に関する大問である。使用された図表のうち、二つの指標の相関関係を経年変化で見るグラフは工夫されていた。全体的に、資源の需給と産業の立地及び動向に関

する標準的な出題内容であり、受験者にはなじみのある出題で取り組みやすかったであろう。

問1 原油の産出量、輸出量、輸入量の上位10か国について示した地図に関する組合せ問題である。原油の生産と需給に関する基本的な知識や理解があれば、容易に解答できる。

問2 アメリカ合衆国、インド、ドイツ、ブラジルにおける資源と発電の特徴について述べた文に関する正誤問題である。各国の発電量の内訳についての基本的な知識や理解があれば、容易に解答できる。

問3 イギリス、韓国、日本の粗鋼生産量と造船竣工量の世界に占める割合の1970～2007年の推移を示したグラフに関する組合せ問題である。資料の読み取りに時間を要するであろうが、作図がよく工夫されており、各国の工業の推移について分析、考察させる良問である。

問4 原料産地に立地を指向する砂糖、セメント、パルプ、ワインの工業の生産量上位5か国について示した表に関する選択問題である。原料生産国について基本的な知識があれば、容易に解答できる。なお、表に関しては、順位項目の配置が第4問の問4とは違っているの、受験者に見やすいよう配慮をお願いしたい。

問5 1980年代以降の日本の産業の動向について述べた文に関する正誤問題である。近年における各種工業の立地傾向について基本的な知識や理解があれば、解答できる。

問6 アメリカ合衆国の三つの地域における産業の特徴を述べた文に関する組合せ問題である。アメリカ合衆国の工業都市に関する基本的な知識があれば、容易に解答できる。

第3問 世界の生活文化と都市に関する大問である。昨年度と同様に設問がA、Bに分割されており、Aは生活文化の分野から2題、Bは都市の分野から4題が出題され、村落の分野から単独の出題はなかった。統計地図による出題では、部分から全体を推測する力を試す工夫も見られた。全体的には、常識的な範囲で判断できる問題も多く、取り組みやすかったであろう。

問1 地図上の四つの地域に分布する伝統的な住居について述べた文に関する選択問題である。住居と気候や植生とのかかわりについて基本的な知識があれば、容易に解答できる。なお、生活分野の出題では、景観写真の利用など出題方法についての工夫も検討されたい。

問2 イスラーム、カトリック、プロテスタントの宗教・宗派別人口の総数と地域別の割合を示したグラフに関する組合せ問題である。世界宗教とのその広がりについて基本的な知識があれば、容易に解答できる。

問3 シャンハイ、ソウル、ニューヨーク、プラハにおける売上高が世界の上位500位以内の企業本社数と国の総人口に占める市域人口の割合を示した表に関する選択問題である。各国の都市システムや都市機能についての細かな知識が必要であり、戸惑ったであろう。

問4 シドニー、パリ、メキシコシティ、リオデジャネイロの都市の特徴について述べた文に関する正誤問題である。大都市の内部構造の変容について基本的な知識や理解があれば、容易に解答できる。

問5 人口規模がほぼ同じ豊田市、長崎市、西宮市の人口増加率、第2次産業就業者の割合、65歳以上人口の割合を示した表に関する組合せ問題である。都市の人口規模や機能について基本的な知識や理解があれば、解答できる。

問6 東京大都市圏とその周辺における東京都区部への通勤率の分布図に関する組合せ問題である。統計地図は過去問の形式を踏襲しており、大都市圏の地域分化について基本的な知識

があれば、容易に解答できる。

第4問 アフリカの自然と人々の生活に関する大問である。アフリカの地誌は平成19年度年以來の出題となったが、今回は生活文化や歴史的な内容に関する比率がやや高いものとなり、歴史的背景を踏まえた地理的認識をもとに地域理解が求められる出題であった。アフリカについては教科書で取り扱われる割合が少ないため、受験者は戸惑ったであろう。

問1 アフリカの標高500～800m、1100～1400m、1600m以上の範囲を示した地図に関する組合せ問題である。アフリカの地形の起伏について細かな知識や理解が必要であり、戸惑ったであろう。なお、分布図についてよく工夫されており、地理的技能が試される良問である。

問2 四つの地域に見られる食文化について述べた文の選択問題である。やや細かな知識を問う内容を含んでいるが、気候と農産物及び食文化の関係を理解していれば、解答できる。

問3 ウシ、ブタ、ラクダについてアフリカ全体に対する国ごとの頭数の割合を示した地図に関する組合せ問題である。地域の自然環境や宗教、産業などと家畜とのかかわりについて基本的な知識をもとに分析し、考察する能力が試された。

問4 アルジェリア、ケニア、ザンビア、モロッコについて輸出額上位3品目とその輸出額を示した表に関する選択問題である。これらの国々は教科書で取り扱われることは少ないが、系統的な地理学習を生かすことで、容易に解答できる。

問5 アフリカの諸都市を成り立ちの特徴ごとに分類した地図とそれらを説明した文に関する組合せ問題である。地域の自然環境の特徴を背景とした歴史的な成り立ちの違いにより都市を類型化した目新しい分布図であり、また象牙や金、岩塩、スワヒリ語など細かな知識も必要であったため、戸惑ったであろう。

問6 エチオピア、ガーナ、南アフリカ共和国に見られるポピュラー音楽の特徴について説明した文に関する組合せ問題である。音楽を題材に歴史的背景を踏まえて地域性をとらえる設問であり、アフリカ各国・地域の細かな知識を必要としたため、戸惑ったであろう。

第5問 現代世界の諸課題に関する大問である。世界の地域別人口の動向、各国の食糧・保健衛生事情や難民問題、経済援助、環境問題について、多面的、多角的に問う出題であった。一部に細かな知識を必要とする設問も見られるが、全体的に基本的な知識や理解があれば解答できる標準的なレベルの問題が多かった。

問1 アフリカ、北アメリカ、ヨーロッパの1700～2005年の人口の推移を示したグラフに関する組合せ問題である。地域別の人口の推移について、歴史的背景を踏まえた知識や理解が求められる良問である。

問2 インド、韓国、サウジアラビア、ドイツの穀物自給率、1人1日当たり供給栄養量、5歳未満児死亡率を示した表に関する選択問題である。各国の食糧事情や保健衛生事情に加えて、経済の発達段階等に関する正確な知識が求められた。

問3 スーダン、ミャンマー、ロシアの難民問題とその背景について述べた文に関する組合せ問題である。各国の民族問題や難民の状況について基本的な知識があれば、容易に解答できる。なお、この設問は「地理A」との共通問題として出題された。

問4 イタリア、オランダ、日本、フランスのODA総額、GNIに対するODA総額の比

率、供与額が最大となる地域を示した表に関する選択問題である。ODAに関する細かな知識が必要であり、また表の「サハラ以南」という表現があいまいで、戸惑ったであろう。

問5 地図上の三つの地域における人為的原因による環境問題について述べた文に関する組合せ問題である。地誌的な内容を含んでいるが、地球環境問題や地域開発についての基本的な知識や理解があれば、容易に解答できる。この設問も「地理A」との共通問題であった。

第6問 佐賀県内諸地域の地域調査に関する大問である。この出題分野は昨年度と同様「地理A」との共通問題である。地勢図や地形図、統計地図、グラフなど多様な資料を用い、それらを読み取る能力や、総合的に分析し、考察する能力が試された。地形図の読図に関する設問が2題あり解答に時間を要したと思われるが、標準的なレベルで取り組みやすかったであろう。

問1 佐賀県内の四つの地域の地形図から読み取れる事柄とその背景について述べた文の下線部に関する正誤問題である。土地利用や標高、距離の計算に関する基本的な知識があれば、容易に解答できる。なお、地形図上の地名については見やすい工夫をお願いしたい。

問2 佐賀城趾付近の1966年と1998年発行の2万5千分の1地形図から土地利用の変化について述べた文の正誤問題である。新旧地形図を比較するものであるが、地図記号に関する基本的な知識があれば、容易に解答できる。

問3 佐賀市内の商業地区や業務地区の土地利用に関する現地調査のための事前準備について述べた文の正誤問題である。調査方法に関する基本的な知識があれば、容易に解答できる。

問4 佐賀市内の三つの地区の土地利用と業種、建物の階数を示した地図に関する組合せ問題である。都市内部の地域変化に関する理解が求められた設問であった。地図については駐車場の凡例や建物の階数の数字がやや見にくいいため、表記についての工夫が必要であった。

問5 大麦、水稻、ミカンの佐賀県全体に対する市町村ごとの収穫量の割合を示した地図に関する組合せ問題である。地形と農産物の栽培地域や収穫量について細かな資料の読み取りが求められた。なお、図形表現図で相対的な数値を扱ったため、受験者に誤った印象を与えた可能性が考えられる。今後、統計地図の作成については配慮をお願いしたい。また、図5の「地勢図」は図1の20万分の1地勢図と紛らわしいので「佐賀県の地勢」などと表記されたい。

問6 韓国・朝鮮、中国、フィリピンを国籍とする外国人について述べた文と佐賀県における国籍別の外国人登録者数の年次推移を示したグラフに関する組合せ問題である。家庭ゴミの分類表という生活に密着した資料から身近な地域の国際化を考えさせる良問である。なお、「2000年代半ば以降」という表現については再考が必要であろう。

3 要 約

(1) 問題の程度

本年度も、基礎的・基本的な教科書レベルの問題を中心に、地理的知識をもとにした考察力や思考力を必要とする問題まで、幅広く出題されている。図表を分析し考察する能力を問う問題や、その地域の歴史的背景を踏まえて地域性を考察する問題、時事的な知識をもとに資料を読み取る力を試す問題など、世界史や現代社会の分野ともかかわる出題が見られ、より総合力を問われる内容であったと言える。ただし、昨年ほど細かな知識を必要とする問題が少なかったため、

全体を通してみると、昨年度とほぼ同じ難易度であったと言える。

今後の高等学校の授業においては、基本的な地理的知識を習得しながら「地理的な見方や考え方」及び「地理的技能」を身に付けることと、世界史、現代社会をはじめ他の教科・科目と関連付けて様々な角度から対象地域を理解しようとする取組みが求められる。

(2) 設問数・配点・形式等

設問数は大問数6題で、第1問から第4問と第6問は六つ、第5問は五つの小問で構成されており、全解答数は昨年度より一つ減って35題であった。

設問形式による分類	平成23年	平成22年
文章の正誤	6	14
選 択	11	10
組合せ	18	12

配点は、第1問、第6問が3点が四つと2点が二つの16点満点、第2問、第4問はすべて3点で18点満点、第3問は3点が五つと2点の一つの17点満点、第5問はすべて3点で15点満点であった。

設問形式と出題形式は、右の表のとおりである。文章の正誤問題が半減し、組合せ問題が増加した。組合せ問題は6択が17題、4択が1題であった。出題形式としては地図、図表、画像（写真）を用いて判断する

出題形式による分類		平成23年	平成22年
文章のみ		6	6
地理的技能	地図使用	15	13
	図表使用	9	10
	画像（写真）使用	0	0
	地図と図表	3	4
	地図と画像（写真）	1	3
	図表と画像（写真）	1	0

問題が35題中29題と数多く出題され、昨年度と同様の傾向であり、多角的に地理的知識や思考力を問う出題意図が読み取れる。景観写真についてはサンゴ礁の形態について判別しづらかったが、地形の説明が加えられているため受験者による解答の行いにくさはなかったと思われる。統計図表については、順位を覚えているだけでは解答できず、長期的な傾向や歴史的背景とのかかわりや、現在の新しい動向を踏まえて解答するものもあり、工夫されたものであった。一方、統計表では設問により順位が縦方向や横方向で示され、形式が統一されていないので今後配慮をお願いしたい。地域調査の小問では、割合が図形表現図で示されたことが受験者にとって誤った印象を与えた可能性もあり、適切な表現方法の検討をお願いしたい。

(3) おわりに

例年、この高等学校教科担当教員の意見や評価が問題作成によく反映されていることは大変有り難く、引き続き御配慮をお願いしたい。今年度の本試験は、問題評価の6視点から見て、いずれの項目に関しても目標を達成し得たものと判断できる。全体としては「地理的なものの見方や考え方」を問う設問や作図の工夫がなされており、問題の難易度としては全体として標準的なレベルであった。

「地理B」の学習は「地理的な見方や考え方」及び「地理的技能」の習得を目指しており、センター試験が高等学校における学習成果を測る物差しである以上、その力を問う出題でなければならない。このような考え方に立って、様々に創意工夫を凝らして考察力・分析力を問う作問により、今後とも受験者の地道な努力が報われるような出題をお願いしたい。